

地域連携による児童の安心安全教育の展開 ー 下校見守り活動・地域安全マップづくりを事例として ー

木村佐枝子¹⁾ 中村俊洋¹⁾ 松岡孝江²⁾

¹⁾心身マネジメント学科 ²⁾入学センター浜松

Deployment of Safety Education for Children through Community Cooperation -Based on Case Study involving Afterschool Watch Activities and Drafting of Community Safety Map-

Saeko KIMURA, Toshihiro NAKAMURA and Takae MATSUOKA

要 旨

本研究では、下校見守り活動と地域安全マップづくりを事例として、安全安心教育への効果を検討した。その結果、以下の5点が明らかとなった。

- ①下校見守り活動は、児童や保護者、学校にとって安心感を与える活動となっている。
- ②地域安全マップづくりは、防犯・防災の意識が高まり、児童の安心安全教育には有効である。
- ③地域が連携することで、児童の見守り活動がより活性化し、地域とのつながりが深まる。
- ④地域の課題解決のためには、平常時から顔の見える関係づくりを行っていく必要がある。
- ⑤教職を志す学生にとって、教育現場のボランティア活動は、教師の資質能力の向上に有効である。

キーワード：下校見守り活動、地域安全マップ、安心安全教育

Abstract

This study focused on an examination of the effects on safety education for children based on a case study involving afterschool watch activities and the drafting of a community safety map. The following five findings were obtained as a result thereof.

- (1) Afterschool watch activities consist of activities that provide peace of mind for children, parents and schools.
- (2) Drafting of a community safety map is effective for safety education for children by enhancing awareness of crime prevention and disaster prevention.
- (3) Cooperation by the local community increases the level of participation in children's afterschool watch activities and deepens ties between the school and local community.
- (4) It is necessary to create a sense of familiarity on a regular basis in order to resolve problems involving the local community.
- (5) Volunteer activities deployed in the educational setting are effective for improving the quality and capabilities of teachers from the viewpoint of students aspiring to become teachers.

Keywords : Afterschool watch activities, community safety map, safety education

1. はじめに

本研究は、平成27年度常葉大学地域交流・連携推進事業に採択された「地域連携による下校見守り『まもろーる』における安心安全教育の展開」において、特に大学生と児童が共に活動した下校見守り活動と地域安全マップづくりの事例及びその効果に焦点をあてたものである。

常葉大学では、教育理念の1つとなる「地域連携」を具現化するため、2015年に新たに地域連携推進委員会を立ち上げた。常葉大学地域交流・連携推進事業実施要項(2015)によれば、地域交流・連携推進事業は、「地域との交流・連携事業に先進的に取り組む教職員に対して支援」されるものであり、その要件は、「地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもの」であり、「大学としてのメリットや効果があると認められるもの」とされている。具体的には、「事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの」、「本学が主体性をもって実施するもの」、「地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等との共同又は連携が明らかであるもの」などがあげられている。

2. 問題と目的

筆者らが研究対象とする地域は、市内の北部に位置し、のどかな田園風景が広がる地域である。大きな事件や事故もなく平穏に見える地域であるが、新東名高速道路の開通による大型トラック等の交通量の増加や過疎地域ゆえの地域の見守りの薄さも課題となっている。しかし、自治会組織は強固な関係性が構築されており、消防団、水防団などの防災組織の取り組みも盛んに行われており、自治会が持つヘリポートを使った大規模な防災訓練も実施されている。

安心安全な社会の実現の為には、平常時からの地域連携が不可欠であり、「自分の命は自分で守る。自分たちの地域は地域で守る」という意識が重要であり、地域が一丸となって防災・防犯活動に取り組むことが求められる。本研究では、学校現場における児童・生徒の下校見守り活動を通して、安心安全なまちづくりに貢献することを目的とする。

3. 研究方法

大学生と児童が合同で行った下校見守り活動と地域安全マップづくりの事例について提示する。更に活動を通し、児童、活動学生、保護者からのアンケート調査及び小学校教員、大学生、卒業生からのインタビュー調査の結果から活動の効果について分析する。

4. 地域貢献と連携

武井(2003)は「地域連携という言葉は、地域と貢献(サービス)という2つの言葉からなる」とし、大学における地域貢献は、「地域住民にとって最も必要なサービスを提供する外ない」としている。また、地域貢献が「大学の本来の使命である」としており、大学における地域貢献の対象が地域住民であることが述べられている。従来の大学における地域貢献の考え方は、大学が地域に対して何かを提供するというものであった。大学の施設開放や公開講座がその代表的な例である。しかし、近年の考え方としては、大学から地域への一方的な支援ではなく、お互いの強みを生かした連携が強調されている。

そもそも連携とは何か。その言葉の如く、目的となるものに向かってお互いが手を取り合い、協力して、より良いものを作り出すことである。したがって、その行動がお互いにとってプラスになるものであり、それによって共に成長できるものでなければならない。

本研究の背景として、2010年10月に開設した社会貢献・ボランティアセンター(HUVOC)の存在があげられる。それまで地域とのかかわりを持ちながら、教員個人や学部学科単位であったものが、HUVOCに集約されることにより学生にとっての活動の拠点と、地域と大学とをつなぐ場としての機能が明確になった。更に、翌年、2011年には、ボランティア活動を通して、学生の犯罪や事故の被害を防ぎ、社会全体の規範意識を高めて地域社会との絆の強化を図ることを目的として県内初となる静岡県警細江警察署との防犯ボランティア活動に関する連携協定を締結した。このことによって、学生の自主的な地域のパトロール活動や小学校、幼稚園等での防犯教室サポートなど連携した活動の基盤ができ、効果的な防犯活動に学生の若い力が発揮できる場となった。また、HUVOCでは2015年に「区民参加型『命を守る』防災ワークショップ」に採択され、地域自治会との連携による防災の取り組みがスタートしている。このような背景のもと、本研究の主題となる地域連携事業が展開することとなった。

本研究による主たる連携先は、大学からもっとも近くにある小学校であり、その地域の小学校が存在する自治会と円滑な連携協働による取り組みである。更に、地域を見守る警察署と地域ボランティア、自治体との連携からなる。更にキャンパスが所在する地域は、「大学のあまるまち」の特性を生かした取り組みが十分に行える環境や設備、マンパワーを有している。その地域と連携することこそ、大学が地域に存在する意義があると考えられる。

地域の理解なしには地域連携は成り立たない。したがって、地域のニーズを拾い上げる機能が重要であり、大学からの一方的な支援ではなく、地域と対話し、地域の持つ課題を解決するために大学は何ができるのかをしっかりと見極める必要がある。地域連携の主体はあくまでも

その地域において生計を立てている地域住民であり、大学は対等な立場で地域をより良くするために一緒に何ができるのかを考えていくことが求められる。

大学と地域との連携の考え方の1つとして、ソーシャルキャピタルの視点が重要視されている。ソーシャル・キャピタル (social capital) とは、一般的には、道路、港湾、空港、上下水道、公園などのインフラストラクチャーのことを言うが、本研究では、「人間のつくる社会的組織の中に存在する信頼、規範、ネットワークのようなソフトな関係」(宮川, 2008) つまり、社会の人間関係を社会資本として考える。

前林ら (2012) は、「ソーシャル・キャピタルとは、まさに『分かち合い』原理にもとづく社会関係資本である」としている。Putnam (1993) が定義する「社会的信頼」「ネットワーク」「互酬性の規範」はすべてこの「分かち合い」の中で成立している。人間は唯一、「分かち合える」存在であり、利害関係のない人間関係は「分かち合い」が基本となる。つまり、「Win-Win」の関係を構築することが重要となる。なぜならば、これらの定義は競争原理では成立することができないからである。勝者と敗者が生じる世界は、信頼関係やネットワークを構築することは不可能である。更に互酬性の規範も生まれにくい。より良い社会を形成していくためには、地域内のソーシャル・キャピタルを如何に高めていくのか、また、地域間のソーシャル・キャピタルを如何に形成していくのかが大きな課題となるであろう。

前林ら (2012) は大学を中核としたソーシャル・キャピタルの強化による効果として「地域活性化」をあげている。大学が持つ施設、設備、人的財産、知的財産を地域の一部として機能させることでその価値が高くなり、「地域の文化レベルが向上」する。更に、「地域の防犯率の向上やボランティア活動が盛んになる」ことも期待されているとしている。

地域と共生する大学づくりを目指していくためには、個としての大学ではなく、地域の拠点として大学が存在することに意味がある。そのためには、大学が地域全体のリーダーシップを取り、地域と共に問題解決や課題に取り組んでいくことが重要となる。それらを実現するために大学を拠点とした取り組みが地域力向上につながっていくものと考えられる。

18歳人口の減少や進学率の伸び悩み、大学数の増加などから大学そのものが存続できるか否かが問われる時代になってきている。言い換えれば、地域コミュニティとの強いつながりが大学存続の鍵を握るものである。したがって、大学をソーシャル・キャピタルの場として捉え、有効に活用していくことで地域全体が大学のキャンパスとして機能することが可能となる。ここに大学におけるソーシャル・キャピタルの意義があるのではないかと考える。

5. 事例

A 小学校の概要

連携先である A 小学校は、1 学年 1 クラス、全校児童 150 人程度、教職員 10 名の小規模校である。2006 年に 2 つの小学校が統廃合されたため、学区は広範囲に渡り、一部の中山間地域の児童はバス通学をしている。また、片道 50 分近くかけて通学し、一人で長時間歩かなければならない児童もいる。2015 年度には、危機管理マニュアルが新たに改訂されている。

小学校の安全教育においては、交通安全運動期間中 (年 4 回) と新学期はじめに登校指導を実施している。また、地震・火災の避難訓練、煙避難体験、救助袋・消火器訓練、引き渡し訓練が定期的に行われている。交通事故や犯罪などは少なくとも 2009 年度より無事故が続いており、犯罪に巻き込まれた事例も報告されていない。

防犯教室では警察官や警備員による実技や講話、防犯訓練は不審者の校舎侵入を想定した訓練、交通教室は交通指導員による講話、実地による道路歩行訓練、自転車の乗り方教室が行われている。

昭和 2 年(1927)に、小学校の教師が増水した川に誤って転落した児童を助けるため川へ入り流され、殉職している。小学校では、毎年 5 月に「命を大切にする日」とし「命を大切にする誓いの言葉」を児童、教職員、地域住民が誓い、命の尊さを改めて考える行事として、30 年近く続いている防災教育の取り組みである。

事例 1：下校見守り活動「まもろーる」

小学校の下校見守り活動「まもろーる」は、「こどもの笑顔を守る」と「パトロール」をかけあわせた学生による造語である

文部科学省 (2006) は、「地域社会全体で子どもの安全を見守る体制の整備と、実質的な安全教育の充実が必要である。学校安全ボランティアを活用し、地域ぐるみで登下校時を含めた学校における子どもの安全を見守る体制を整備するため、学校で子どもたちの見守り活動を行う学校安全ボランティア (スクールガード) の養成・研修を行う」としており、地域でこどもの見守り活動を行うことの重要性が述べられている。

まもろーるの実施の背景には、学生が小学校の防犯教室において警察官に同行して活動したことから、小学校側から下校についての課題があげられ、学生の自主的な見守り活動が始まったことが発端となっている。

児童の下校見守り活動「まもろーる」は、あらかじめ小学校から 1 ヶ月単位で出された集団下校のスケジュールをもとに、学生が授業の空き時間を利用して、児童の下校見守りを行うボランティア活動である。活動主体は、心身マネジメント学科木村ゼミの 3、4 年生、ボランティアサークル ThunderBirds で、地域でのつながりを深め、

防犯・防災意識を高めることを目的としたもので、2014年10月から活動を開始し、2015年度は15回、延べ67人の学生が活動している。

活動においては、活動のフローを作成し、小学校と大学が共有し、毎回、活動報告書をHUVOCに提出している。活動時には、防犯ベストを着用することで地域の抑止力につながっている。

児童の集団下校時間に合わせて学生が小学校に向かい、各地区に分かれて児童の下校につき添う。原則として児童が自宅に入るのを見届け、小学校に戻り、大学に報告するまでがまもろーの活動としている。

活動の課題としては、児童の下校時間に合わせた活動となるため、授業のない学生に活動が偏る傾向にある。授業数が多い、1、2年生は参加したくてもできない状況にある。また、長期休暇中の8月、9月、2月、3月や試験期間中などは活動ができなくなるため、年間を通じた活動が困難であることがあげられる。

事例2：都田安心安全マップ

A 小学校と連携したマップづくりを発案したきっかけは、小学校が実施する「交通安全リーダーと語る会」に学生がボランティアとして参加したことに始まる。浜松市教育委員会によれば、「児童の交通事故防止対策の一環として、県下の全ての小学校」で実施されており、「学校・保護者及び地域関係者が緊密な連携のもとで、事故防止と交通安全活動を推進」している。それぞれの学校の地域性や課題をもとにテーマを決め、地域全体で交通安全の推進に取り組むものである。

具体的な作業としては①まち歩き：学区を7つのグループに分けて、地域のまち歩きを行う。危険箇所、安全箇所を含めたチェックシートを用いて、小学生と大学生が合同で実施した。また、地域自治会や警察署からも協力を得て、写真や動画で記録を残すようにした。②マップづくり：まち歩きで得た資料をもとに、ふせんやシールを用いて、大型地図に情報を落とししていく。各グループに大学生が入り、児童と話し合いながら地図を作成していく作業を繰り返した。地図作成においては、災害図上訓練DIG(小村, 1997)^{注1)}の手法を用いた。DIGとは、Disaster Imagination Gameの頭文字をとったものであり、1997年に小村らによって考案された参加型防災ワークショップである。参加者は地図を囲んで、地域の課題やリスクを、「見える化」したもので防災の有効なツールである。学生たちは事前に定期的実施されているDIGセミナーに参加し、あらかじめ研修を行った上で活動をした。地図づくりでは、防災のみならず防犯の視点を取り入れ、こども110番の家や交通事故多発箇所、不審者情報等も入れ込んだ。防災マップづくりの事例は多々あるが、防犯情報を盛り込んだという点が特徴的であると言える。③マップづくり編集作業：マップづくりの編集作業においては、専門家の意見を聞きながらマッ

プの修正を行った。市や区の防災担当者、災害関連NPO、ボランティア、自治会、社会福祉協議会等の意見を聞きながら修正を行っていった。また地図上の目印となる公共機関や病院、地域の商店などは見落としがないよう再度チェックを行った。

6. アンケート調査・インタビュー調査

①小学生(5・6年生)アンケート

5年生の男子12名、女子9名、6年生の男子14名、女子19名、計54名にアンケートを行った。

<まもろーの活動について>

通学時間は1番長い児童で50分、近くで2分であった。

登下校で困ったこととして、学校から家まで遠い、帰り道が暗い、一人で帰るのが怖い、車が多い、知らない人に声をかけられた、大雨が降った等があげられ、児童が登下校時にトラブルがあったことがわかった。

<マップづくりについて>

- ・6年生で実施する時は、危ない場所を再確認したい。(5年生男子)
- ・危険な場所を低学年に伝え、そういう場所では気を付けることができるようになったのでよかったです。(6年生女子)

②教員インタビュー

小学校の教員5名(管理職、担任)にインタビューを行った。

<まもろーの活動について>

- ・安心感が高まるとともに、会話する楽しみが増えるということで、子どもたちはとても楽しみにしている。学校としても、より安心できるため、とても有難いと思っている
- ・成果として小学校も学生も何を得たのかをきちんと振り返り、活動を始めた目的が達成できているのか、方向性が正しいかどうかということを見つめていくということが大切だ。
- ・双方にメリットがないと続かないと感じる。並んで歩くだけであつたら成果は難しい。
- ・小学校では、自立を促したい。守られて帰ることが本当に子どものためになるのか。

<マップづくりについて>

- ・自分たちの地区について調べる活動やまとめる活動をすることで、防犯・防災の意識が高まったと思う。
- ・今後、大学生との連携をすることとして、なん

でもよいので手伝ってくれると嬉しい。特に得意なものを教えてほしい。

・課題とともに、今後の連携の発展につながる意見もあった。

③学生アンケート

活動学生の内訳は2年生5名、3年生12名、4年生5名、計22名(男8名・女14名)。

<まもろーるの活動について>

・児童の下校の様子がわかることや、児童と触れ合うことでコミュニケーションの取り方等よい経験になった。

・小学生が友達との会話などに夢中になってしまい周りの危険がしっかりと見えていない場面があり、危ないと感じたことがあった。

・活動したいが授業が多く、なかなか参加することができない。

<マップづくりについて>

・形としての結果を残せたので、防犯・防災への次のステップにつながったと思う。

④保護者アンケート

アンケート回収数：1年生12名、2年生8名、3年生12名、4年生0名、5年生10名、6年生17名：計59名。

<まもろーるについて>

まもろーる認知度：61%

まもろーるの情報：児童から37%、その他12% (学校だより、下校をみかけた、PTA活動)、小学校HP10%、教員から2%。

・子どもたちはお兄さん、お姉さんと一緒に帰ってきたと嬉しそうに言ってくれるし、親も安心。

・大学生といろいろな話ができてよいと思います。

・これからも続けてほしい。集団下校といっても児童数が2名なので1人で下校することが多いため。

・地域の人や大学生と連携がとれていて心強い。

・家の近くで危ない場所があるためすぐ近くまでついてきてくれて安心。

<マップづくりについて>

大学との連携によるマップづくりの認知度：61%
マップづくりの情報；児童から41%、小学校HP12%、教員から5%、その他5%。

・細かく情報が記入されていてよいと思う。

・年代、世代の違う人同士の関わり合いがよいと思う。

・登下校時のことについて、どこが危険かよく知

らないので調べていただいていたありがたいと思った。

・学生と一緒にすることができ、「何かをともに作る」という取り組みがとてもよいと思った。

・安全パトロールにより大学生の方がいろいろな所に気が付いていると思う。

・自分の住んでいる地区だけでなく、学区の危険箇所がわかってよい。

・できあがったマップの評価：とても良くできている66%、良くできている34%。

・活用できると思った。危険な場所を子どもに教えることができた。

・いろいろなマークや写真を上手に使い、とてもわかりやすくできていると思う。

・子どもも一緒に作ったので、普段の手紙よりじっくり見た。

・随時更新してもらえるとうれしい。

・防災と防犯の両方が載っていて良い。

・親が見ても今まで気づけなかったことが記入されていてすばらしい。

・子ども110番の家など近所でも知らなかったところがあり、勉強になった。

・親子で安全や地域のことを話すきっかけになった。

・危険な場所の実際の写真が少しでもあるととてもわかりやすいと思う。

・少しお店の位置が違っている。

・「ここは危険だと思っている」場所が載っていなかった。

i. 大学に期待すること、要望

・全学年の集団下校時ではなく、低学年だけの下校時にボランティアをお願いしたい。

・これからもこのような取り組みをぜひがんばってほしい。そして情報を発信してほしい。

・いろいろな面で一緒に活動すれば、お互いよい刺激になるのでよいと思う。

・地震の時の情報があるとありがたい。

・大学生のお兄さん、お姉さんが先生と小学生の間で関わりやすい存在になってもらえるとうれしい。

・これからも地域の人たち(子ども、高齢者、障がい者、住民)と交流して頂きたい。

・陸上だけでなく、勉強も見てもらいたい。

・毎年少しずつ危険箇所やがけ崩れの場所は変わってくるので続けてほしい。

・様々な科があるので、子どもたちにもいろいろな職業があることを伝え、体験等もさせてもらえると良い。

・陸上等指導して頂いていて、とても良い影響があると思う。

・常葉大学には「こどもむら」からお世話になり感謝している。

- ・事故があった場所などは、警察にも協力してもらい対策をしてほしい。
- ・たまに一緒に帰ってくれるみたいで子どもがとても喜んでいる。
- ・都田全部を載せてもらいたい（マップ）。

ii. その他、気づいた点について

- ・下校時、一緒に帰る姿を何度か見たことがありますが、とってもうれしそうに楽しそうに学生さんと話している子どもを見て感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・公会堂は全地区載せてほしい。
- ・夏の暑い中も子どもたちに付き添っていただき、本当にありがとうございました。

⑤卒業生インタビュー（卒業後、教職の現場に就職）

本研究の目的である「安心安全教育の展開」は児童のみならず、大学生にとってどのような効果があったのかを明らかにすることであった。卒業後の効果として、教職を志す学生にとって、その活動が教育現場でどのように活かされているのかを明らかにするため、この活動を経験した、現在教育現場にいる卒業生3名にインタビュー調査を行った。

i. 中高校一貫校保健体育講師、男性

<まもろーる>

- ・地域の治安のよさゆえ、活動中に不審者や交通事故から直接児童を守るという機会はなかった。しかし、児童と一緒に活動し下校を見守ることで、児童の防犯、防災や交通ルールの向上につながったと思う。児童のみならず活動した学生も再認識できたと思う。
- ・小学校ではまもろーるの活動を評価する一方で「児童の自立を促したい」という先生方の意見もあった。守られて下校するだけでなく、児童が一人でも下校できることも安全教育の重要な部分だったと思う。したがって、毎日学生と帰るのではなく、月に数回程度、一緒に防犯、防災や交通ルールについて確認しながら帰るのはちょうど良い回数だった。
- ・まもろーるの活動により、多くの児童に関わることができ、子どもたちのやる気とパワーを肌で感じ取れたことは教職を志す学生にとって良い刺激となった。
- ・2年間の活動の中で防犯、防災、下校に関する子どもたちの意識の変化を見れたことや先生方からも学校生活の中で子どもたちの成長が見れたことはとてもうれしく、自分自身の教職に対するモチベーション向上につながった。

<マップづくり>

- ・まもろーるで得た防犯・防災の意識や知識をアウトプットする作業として、とても役立つよい機会になった。普段の通学路を、改めて見直すと危険な箇所がたくさんあることに児童が気が付くことができた。また、成果物として残せたこと、この活動をつづけていき、低学年の児童に受け継がれどんどん良いマップへと情報が書き足されていくとよい。

<教育現場で役立っていること>

- ・教師としての自覚の芽生え。自分自身の意識やこころの問題なので、個人差はあると思うが、大学を卒業してすぐ、それまで学生として長い間教わる側だったのが、いきなり教師として教える立場になるその準備段階として学校の雰囲気や子どもとの関わり方などを感じ取る場として、学生時代のボランティア経験が現在の勤務する学校でも役立っていると感じる。

ii. 特別支援学校講師、男性

<まもろーる>

- ・実際に児童たちと歩くことで児童と接する時間が増え、様々な話をしてコミュニケーションとれたことがとてもよかった。また、その地域の特性や下校時の様子を知ることができ、それにより下校環境を整えたり下校指導を工夫したりして子どもたちの安全を守っていけるのではないかと思った。地域の方との関りが増えていき多くの面で連携していくことができ学校と地域とのつながりの輪が広がっていきとても良かった。
- ・子どもたちとの関わり方では、通学路では危険箇所がないか、実際に安全に留意して下校しているかなどの実態把握することができた。

<マップづくり>

- ・子どもたちと共同制作することで危険箇所に対する大人の目線と子どもの目線が違って、子どもたちは登下校時に様々な視点で危険な場所を探し、気を付けて歩いていると思った。また、危険であろうと思った場所以外にもその地域にしかわからない情報を子どもたちが知っていたため、大人側も見る視点を変えていく必要があると思った。子どもと地域の方と教員でマップを作っていればもっと多くの視点から見ることができ、いざというときに役立っていくのではないかと思った。
- ・子どもたちから出た意見を聞き、その意見をまとめることや積極的に活動に取り組める工夫や言葉かけ、話し合いをする際に意見を出しやすくするように言葉かけ、同意、少人数のグループを編

成したりして意見を言えやすくする環境づくりが重要だと思った。

<教育現場で役立っていること>

・小学校でのこの経験は、児童に対してどう段階を追っていけば、スムーズに理解を深めたり、活動に取り組めたりするのかということを学ぶことができた。このことが、今、教育現場の中で日常生活の指導や授業を行う上で一番役立っていると感じる。

iii. 小学校支援員 女性

<まもろーる>

・教育実習は中学校で行ったので、小学生と関わることのできる貴重な体験だった。
 ・児童と少人数で下校する中で学校では話さなかったことを話してくれたり、今の小学生がどのような関心をもっているのか知ることができた。
 ・下校の見守りは児童の安全が大事であるが、児童との会話を毎回とても楽しみにしていた。

<マップづくり>

・子どもの視点は大人が気づかなかったことや、細かい点などの意見がでて、それをマップに反映することができた。
 ・大学生と小学生と一緒に同じ目的をもって取り組みことができよかった。

<教育現場で役立っていること>

・子どもとのコミュニケーションのとり方が最も役立っていると感じる。児童の関心や興味を引き出すことは、学生の時この活動で得られた経験を活かすことができていると思う。

7. 活動の成果

①都田安全安心マップの配布

小学校区全戸と関係機関等に 2000 部を配布した。



図1 都田安心安全マップ

②事業成果報告会の実施

大学内ホールにおいて、小学生と合同で事業成果報告会を実施した。報告会では、こどもの笑顔をまもろーる活動を卒業研究としてまとめた学生の発表が行われ、児童、教員、活動した学生のアンケート、インタビュー調査により、活動の有効性を明らかにした。また、児童と学生による寸劇では、防犯・防災の視点から「安心・安全マップ」の活用を呼びかけた。

報告会では、都田地区自治会長、浜松市教育委員会や静岡県警細江警察署、浜松市北区・区振興課等から「地域の安心安全を守るのは、やはり地域の方々が意識をもって行っていただくことが大切。今後も継続して取り組んでほしい」、「マップを作ったことで終わらせるのではなく、家庭や登下校でどう活かしていくかを考えてほしい」との講評を得た。

③警察署関連発表、表彰

警察庁が推進する「全国学生安全・安心ボランティアサミット」(北九州市開催)において、ゼミ学生が静岡県代表で活動成果を発表した。また、この取り組みが地域住民の安全安心につながったと評価され、静岡県警細江警察署及び静岡県防犯協会より地域安全功労者に対する感謝状が授与された。

④メディアによる発信

新聞社 2 社 4 回、浜松市広報誌 (ENGAWA)、浜松キャンパス広報誌など多くのメディアに取り上げられた。

8. 考 察

児童の安全教育においては学校現場のみに委ねるのではなく、地域全体で児童の安全を守るための連携・協力が不可欠である。本研究では、地域連携による児童の安全教育の取り組みとして、下校見守り活動まもろーるとマップづくりを事例とし、その成果をアンケート及びインタビュー調査から明らかにしてきた。

児童の下校見守りについては、既に PTA や地域のボランティア (スクールガードリーダー) によって活動されてきた、そこに大学生の若い力が加わることで、児童の見守り活動がより活性化し、地域とのつながりが深まる活動になった。地域防犯で課題となるのは、構成員の高齢化であり、児童と年齢の近い大学生の参加は若い世代の防犯ボランティアの活性化につながるものと考えられる。また、学生が親しみやすい「まもろーる」というネーミングをつけたことで、学生にとっても取り組みやすい活動につながったと考える。

児童アンケートでは、少なからず登下校時に危険な体験したことがあり、児童の登下校には見守りが必要であることが明らかとなった。

学校関係者のインタビュー調査では、「安心感が高ま

る」という一方で、「並んで歩くだけは成果は難しい」「自立を促したい」という語りもあったが、活動にはプラス面とマイナス面があり、活動が単発で終わらないためにも気づきや反省点を常に共有しながら児童の安全教育のためにボランティアとしてできることを考えていかなければならない。

学生アンケートでは、児童とのコミュニケーションのとり方など、良い経験につながっている一方で会話に夢中になりすぎて危険な場面があったことが明らかとなった。一方で下校時間と授業の空き時間が合わないに参加できず、参加する学生が固定化されることも課題である。

保護者アンケートでは、まもろーるの認知度は61%であるが、「近くまで来てくれて安心」「大学生との会話を楽しみにしている」など、大学生に期待する意見を得ることができた。

マップづくりにおいては、既にまもろーるの活動で児童と顔なじみになっていたことから、子どもたちとの関係づくりが円滑におこなわれ、お互いが意見を出しやすく、マップづくりに反映することができたと考える。児童アンケートでは、「再確認したい」「低学年に伝えい」など、今後もマップを活用する意見が出されていた。更に、教員インタビューでも「自分たちの地区について調べる活動やまとめる活動をすることで、防犯・防災の意識が高まった」との語りがあり、児童の安全教育につながる取り組みになった。

保護者アンケートでは、「何かをともにつくる」という取り組みがとてもよい」という意見や「随時更新してほしい」「親子で話すきっかけになった」など今後の活動につながる意見があった。

また、特筆すべきは保護者対象のアンケートにあった「大学に期待すること、要望」であるが、低学年の下校時のまもろーるの要望やマップの情報の更新といったこれまでの活動の継続や、地域との交流、大学の専門性を子どもたちの学びにつなげてほしいこと、大学で実施している「スポーツフェスタ」や「こどもむら」などへの期待も記載されており、地域が大学との連携について好意的な印象をもっていることが明らかとなった。

教育現場で働く卒業生のインタビューでは、学生時代の活動が現在の教育現場において、「教師としての自覚の芽生え」「子どもとの関わり方」「コミュニケーションのとり方」など、具体的に役立つ体験であったことが明らかとなった。教師を志す学生にとって、学校現場でのボランティア活動は教育実習以外で学校現場を知る機会であり、今後の学校教育を担う教員の資質能力の向上(文部科学省, 2015)という視点からも学校インターンシップが導入されることから、教師を目指す学生にとって学校現場のボランティア活動は益々重要視されると考えられる。

9. 今後の課題

今後の課題としては、以下の3つがあげられる。

①まもろーるの継続実施

一般的に学生の活動は、期間限定である。したがって、ボランティア活動も毎年学生が入れ替わることになる。そのような中で、まもろーるを開始した時の意思を引き継ぎ、今後も継続実施をしていくことが重要である。活動主体となるゼミやサークルできちんと引き継ぎを行い、継続実施ができる仕組みをつくっていくことが必要である。

さらに課題となっていた時間が固定されるまもろーるに加えて、自由度の高いパトロールとして、自転車地域安全を見守る「まもちゃり」(自転車パトロール)を今後実施していく計画である。これによって、活動する学生が固定することなく、多くの参加が見込めると考える。

②状況の変化に合わせて都田安心・安全マップの再編や検証をしていく。これについては、平成28年度A小学校交通安全リーダーと語る会でマップ活用したまち歩きが実施されており、学生もこの活動に参加し、再点検を行った。マップづくりに終わらず、テキストとして活用されている。時期をみて予算の確保と再検討した内容でマップを更新できる仕組みをつくっていききたい。

③都田の一部、新都田地区(都田中学校区)についても計画し、新たな連携を構築する。これについては、平成28年度地域交流・推進事業採択されたことから、新たな取り組みを行っていく計画である。

10. おわりに

地域連携により児童の見守り活動や地域安全マップづくりは、安心安全教育の有効なツールと言える。災害に強いまちづくり、犯罪のないまちづくりを目指していくためには、地域ぐるみで地域の課題を知り、その課題の解決のために連携・協力し、平常時から顔の見える関係づくりを行っていく必要がある。大学は地域の知の拠点となるべく、大学の使命である教育・研究・社会貢献に一層取り組んでいく必要がある。

注1)

災害図上訓練 DIG (Disaster Imagination Game) とは、小村・平野によって考案されたものであり、DIGとは Disaster (災害)・Imagination (想像力)・Game (ゲーム)の頭文字をとって名付けられた。命名は平野によるものである。

参加者が大型地図を囲み、議論をしながらペンやシール、付箋を使って、安全な場所、危険箇所の書き込みをしていく。

小村・平野(2003)は、「自衛隊が用いている指揮所

演習などのノウハウを参考に地図と透明シートを用いて、書き込みを加えながら行う、災害救援にかんするブレインストーミングのための仕掛け」であるとしている。

本研究では、ゼンリンの1/1,500大縮尺のA0版のカラー地図を利用した。

文 献

小村隆史・平野昌「図上訓練 DIG (Disaster Imagination Game) について」『1997年地域安全学会論文報告集』、1997年、136-139頁

前林清和・木村佐枝子・江田英里香「ソーシャル・キャピタルとしての大学の社会貢献活動、安全・安心社会システム研究、第1巻、第1号、2012年、17-26頁

宮川公男：『ソーシャル・キャピタル』－現代経済社会のガバナンスの基礎－、東洋経済、2008年

Putnam, Robert D. with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti, Making Democracy Woke: Civic Tradition in Modern Italy, Princeton University, 2003

武井昭『大学と地域貢献』高崎経済大学附属産業研究所編、日本経済評論社、2003年

[インターネット]

浜松市教育委員会ホームページ

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hokyu/anzenkatarukai.htm>

文部科学省ホームページ

http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/12/05120900/014.htm

文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm (2016年8月1日参照)

謝辞：本研究は、平成27年度地域交流・連携事業に採択されたもので、浜松市立都田小学校との連携・協力のおかげで成し得ることができました。また、関係機関の皆様にも貴重なご意見をいただくことができました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持と御礼を申し上げます。